

# 大山町の地域づくり

—— キブツ交流の視点から ——

別府大学文学部人間関係学科

教授 富吉素子

## I はじめに

大山町は、かつて「梅、くり植えてハワイに行こう」のキャッチ・フレーズで有名になった一村一品運動の発祥の町である。自治体、農業関係者、各団体の方たちにとっては周知の町であり、昭和40年代以降、今日にいたるまで、村おこしや地域づくりのモデルとして熱いまなざしで見られてきた。また、一般市民も先のキャッチ・フレーズの目新しさに興味をそそられてきた。

今回、大学の授業「地域社会学」のグループ研究の一環で大山町を訪問した。7月のある雨上がりの蒸し暑い日であったが、山中の川もには霧がたちこめ、町の中心部にある農協直営の「木の花ガルテン」には、季節の野菜やきのこをふんだんに使ったお料理が100種類も並べられていて、学生たちは大満足であった。また、大山町のまちづくりに大きな貢献をされたメンバーの一人、緒方英雄（大山町総務課長）さんに長い時間、ご説明いただきその熱意と気迫に深く胸打たれるものがあった。

学生グループの研究テーマは「地域社会と郷土料理」であり、大山町の食材としての特産品に関心をもっての訪問であった。学生による研究報告は年度末に行われるが、ここでは、筆者が以前から興味をもっていた大山町とイスラエルのキブツとの交流について述べてみたい。

キブツについては、1960年代～1970年代に研究が進められ、多くの研究書が出版された。それによれば、キブツは自由と平等を理想として農村づくりが行なわれ、長い歴史をもつところでは、す

でに1世紀近い年月が経過している。大山町がキブツと交流し、学び、そこから得られた理念や精神を町づくりのなかに生かし、何よりも若者たちに夢や希望を与えつづけたことは驚嘆にあたいする。今日では、姉妹都市のメギド町長から「もう何も教えることはない、今度は、こちらが教えられる番だ」とまでいわれたという。

現代の日本は、政治、経済、社会、教育など、あらゆる分野でゆきづまりが感じられ、それらの改革は容易なことではないと思われる。このような時期に大山町の町づくりについて再考し、町づくりに多くの影響を与えたといわれるイスラエルのキブツについて考えてみたいと思った。

## II 大山町のまちづくり

大山町は、大分県の西部に位置し、福岡県、熊本県との県境にあたる日田郡の中心に位置している。町面積約46km<sup>2</sup>、人口約4,100の農業を基幹とした町である。昭和35年の生活白書によれば、大山町の所得水準は、当時、文化的生活を行うのに必要とされた所得水準の約三分の一しかなかったといわれ、ひじょうに貧しい状況にあった<sup>1)</sup>。当時、日本は池田勇人総理大臣により所得倍增論が



1) 大山町企画情報課、緒方英雄（1990）「町は劇場、町は舞台」—地域振興について考える—  
財団法人 電源地域振興センター講座より

大山町の農家人口（年齢別）の推移

(単位：人)

年次	区分	農家人口	0～15歳	16～29歳	30～34歳	45～59歳	60～69歳	70歳以上
昭和55年		3,422	750	632	578	725	343	394
昭和60年		3,447	800	535	585	730	382	415
平成2年		3,111	678	446	578	612	413	384
平成7年		2,846	560	379	545	517	427	418

1999『大山町・町勢要覧資料編』より

説かれ、また、農業基本法が制定され、日本の農業が大型化への道を歩み始めた時期でもあった。大型化の意味するところは、主食の米の増産化であった。時の町長矢幡治美さんは、大山町の耕地面積の狭さと急峻な地形には、米作りは向かないと判断した。そして、その学識と情報のゆたかさから、田んぼをつぶし、多くの批判や抵抗のなかで、苦難を乗り越え、試行錯誤の結果、小さな面積から大きな収益をあげる果樹作りを選んだのである。それが、第一次NPC (New Plum and Chestnuts) 運動<sup>2)</sup>であり、米や麦を梅と栗に変え、まだ海外旅行など少なかった時代に「梅栗植えてハワイに行こう」というキャッチ・フレーズをつくって、農家に夢と希望をあたえた。この第一次NPC運動は、村の援助のもとに36年から39年まで行われ所得水準も上昇し、果樹栽培は軌道にのった。これ以後は、農協が主体となって事業を進めることとなり、村はこの年、第二次NPC (Neo Personality Combination) 運動<sup>3)</sup>を宣言した。

第二次NPC運動は新しい人間関係を築く人づくり運動を意味し、村は村民の連帯意識を高めるためのいろいろな行事を用意した。その一つが若者をイスラエルのキブツへ派遣することであった。その目的は共同体の研究であり、44年には3人の青年を派遣している。

イスラエルは政情不安定な地域であり、中東戦争や社会情勢の影響で毎年とはいかなかったが、

30年に20回も研修生を送り出し、平成12年の段階で57名に上る青年がキブツ研修を果たしている。研修費用は私費であったため、その調達には苦労をともなった。そのため、後には、研修生OBがその恩返しのために結成したのが「世界を知ろう会」であった。

その会長である伊藤勝治さん<sup>4)</sup>は第三次研修生であり、「わたしたちは素晴らしい研修に行かせてもらったので、何らかのカタチで町に恩返しをしたいと感じていました。芝居を興行したり、チャーター便を手配して海外研修を企画したり、イスラエルからピアニストを招いてコンサートを開いたり…。農村に住んでいるけれど、世界に目を向けていこうといろんな活動に取り組んできました。10年前まで、世界を知ろう会は大山町のまちづくりのリーダー的存在だったような気がします」<sup>5)</sup>と、述べている。さらに続けて、伊藤さんは、「この研修を支えていたものは、未知なるものに挑戦する心であり、失敗を恐れぬ勇気だったのではないのでしょうか。それは大山町がNPC運動という独自の町づくりをするときの原動力になりました」とも述べている。

大山町史『虹を追って』<sup>6)</sup>は、1,024ページか



2) 対談-1 自治体のイノベーション (1988)『The まちづくりView』P68

3) 同上P68

4) 第三次研修生 (昭和45年派遣)

5) イスラエル・メギド町姉妹町締結30周年記念制作CD「世界を知ろう会」

6) 大山町史編纂委員会 (1995) 第一法規出版株式会社



大山町発行のパンフレット『ハーブティを一緒に』より

らなるものである。第一編・大山町の自然と環境、第二編・歴史の展開、第三編・理想(虹)を追う大山、第四編・教育、第五編・民俗と文化財、のほかに特編をもうけ、NPC運動の活動と歴史について特筆している。このように名づけられた町の政策はまれであり、大山町の個性が光っている。しかしながら、「町づくりの原動力」と評されたキブツそのものに対する記述は2ページ余りにすぎず、それがかえって、キブツの理念と精神が各分野、各政策のなかに浸透しているがゆえではないかと思われる。

このように、キブツへの研修生派遣を基礎に第二次NPC運動の人づくり運動は続けられた。

第三次NPC (New Paradise Community) 運動は、昭和45年に提案され、それは、すべての住民がいつまでも住んでいitくなるよう条件を整備しようというものであった。町長の矢幡治美さんは「田舎でも、都会と同じように、文化的な生活のできる施設が、だれでも、徒歩で15分くらいの行動半径のなかになくてはならない」という考えの持ち主であったから、そのことを具体化した町づくりを行った。つまり、町内35の集落を8つにわけて、それぞれ「文化集積団地」と名づけ、そこに、コミュニティセンターとか児童館、公園、プールな

どを整えることにした。

この「文化集積団地」ということばは余り、聞きなれないことばである。このことばにも見られるように、キブツの理念や精神、そして村づくりの考えかたなどが、大山町のまちづくりに大きな影響を与えているのがわかる。

## III イスラエルのキブツ

キブツ (Kibbutz) は資本主義国イスラエルの農村に多数散在している、徹底したユートピア社会主義に基づく、生産と消費と教育の共同体のことであり、ヘブライ語で集団を意味している<sup>7)</sup>。キブツは、イスラエル建国よりもはるか以前の1909年、東ヨーロッパにいたユダヤ人がその強い民族主義と信仰のゆえに迫害にあい、シオニズムの波にのって、イスラエルのデガニアに農業開拓方式の集産共同体をつくったのが始まりとされている<sup>8)</sup>。

今日、イスラエルの人口550万人のうち約一割が農村地帯に住み、その大多数がキブツ、モシャブという2種類の共同体に住んでいる。キブツは270ほどあり、メンバーはキブツ経済のさまざまな分野ではたらいっている。

キブツの特色としては、①私有財産をもたない(財産はすべてキブツの所有である) ②男女ともキブツの労働に従事する(賃金、貨幣、雇用労働はない) ③食・衣・住・医療・教育・福祉・文化活動などの設備と費用はすべてキブツの責任(高齢者、障害者、病人なども生活上不安がない)である ④夫婦は同居するが、家事は掃除、家具・寝具の整理、お茶ぐらいで強制的な家事分担制はない ⑤子どもは出生から18歳まで子ども地区で育てられる。それは年齢段階に応じて、乳



7) 嶋田英雄 (1991) 『人間の母港—家庭』 家政教育社 P47

8) 同上P48

9) 前掲PP49~50

10) 山根常男 (1965) 『キブツ—その社会学的分析』 誠信書房P135

児、幼児（2～5歳）、小学校（6年または8年）、高等学校（6年または4年）に分かれ、昼間は園や学校で学び、夜はそれぞれの宿舎に帰る。したがって、子どもは社会的、経済的に親から独立している。⑥18歳以上になり、結婚すれば、キブツで働く限り、住居をもらえる。⑦運営上の原則は「自由・平等」、「共同体との調和」および「直接民主主義」（すべて重要なことは全員総会と各種委員会で決める。すべてのものが食事当番などにあたる）<sup>11)</sup>などがあげられる。

これらの特徴のうち①や②はキブツがユートピア的共同体をめざしているのでよくわかる。しかし、それがイスラエルという資本主義国家内で行われることはなかなか理解しがたい。にもかかわらず、大山町の研修生はのちに述べるようにそのことを自然にとらえている。

その他の特徴の一つとして、キブツは居住地域と経済地域からなっている。居住地域には、中央に共同食堂や文化ホールがあり、一般の住宅はそれをとりまくように位置している。初期には住居地区と農園のあいだには鶏舎、牛舎、倉庫が入った農場地区や、機械地区などがあった。そして、それは徐々に改善され、居住地域と経済地域の間には緑地帯が設けられるようになった<sup>12)</sup>。

このことは、先に述べた町長の矢幡治美さんの「田舎でも、都会と同じように、文化的な生活のできる施設が、だれでも、徒歩で15分くらいの行動半径のなかになくてはならない」という考え方に表れているようである。

#### IV 大山町の青年たちが見たキブツ

大山町では1969年から30年にわたってイスラエルのキブツに研修生を送ってきている。

その方々に直接お話を伺ったが時間の都合で今回は保留となった。しかし、大山町と姉妹町のメギド町締結30周年記念の『世界をしろう会—DISCOVER THE WORLD CLUB—』CDにより、それぞれの方々の思いを知ることができた。

ここでは、その後の大山町のまちづくりにとつ

て、その考えかたの基礎に影響を与えたと思われるキブツのあり方、考え方を、初期研修生のレポートの中から、いくつかとりあげてみた<sup>11)</sup>。

まず国民性の違いについて、第一次研修生のKさんは、「私たちの日常生活はあまりにも経済的なことのみにはしりすぎて、ほんとうの人間性が忘れられている…アチラ的生活は精神的に、人間に幅があり、うるおいがある。私たちの無能、趣味の悪さがわかりました。」と述べている。また、特に、町の老人たちが金もうけに執着して、人生を大切にしていないことを指摘している。気持ちが狭く、若い人の世界を理解しようとし、と手きびしい。この意見は、その後、他地域に先駆けて取り組まれた大山町の生涯学習の中にかかされている。たとえば、1977年度の高齢者学級のための学習計画の一つとして「若い世代を理解する」という行事計画がある<sup>12)</sup>が、このようなかたちで解決への糸口がさぐられていたのではないだろうか。

つぎに農業については、やはり、第一次研修生のYさんは「日本の農業が遅れている原因は数々ある。しかし最大の責任は農家個々にある。昔からの農法にその場主義の機械を導入したり、数えればキリがない。…頭脳と軽労働で再建する農村でなければならない。それを国に、県に、人に頼む必要はない」と述べ、その根拠として「イスラエルのキブツ、それは十分開発された、人間が人を頼らず自分たちの英知と団結で、築いた共同体である」と分析している。町を築いていく根本的な基盤が、国や県ではないこと、じぶんたちの頭脳であることをキブツより学んだのではないだろうか。また、同じく第一次研修生のEさんは、ある事業計画が出されると、町では、「まず、既成概念で＜金＞が」優先され、金が不足すれば断念される。しかし、キブツでは「必要性のみ、徹底的に話し合い、その価値判断がなされる。そうして必要なことに対しては、なんとか作る方法はないのか」という話し合いに移っていく、と論じ、「みんなの幸せのため、その可能性に向かって力を合わせていく」やり方に共感し、学ばねばならないと、述べている。

さらに第六次研修生（1979年派遣）のMさんは、次のように述べている。①キブツは貧富の差がな

11) 前掲イスラエル・メギド町姉妹町締結30周年記念制作CD「世界を知ろう会」

12) 前掲『大山町史』P638

い社会である。キブツには給与がなく、労働をお金で評価しない。メンバーは必要に応じて生活に必要なものを受け取ることができる。たとえ、そのキブツの長といえども、皿洗いをしたり、家畜の世話をしたりする。②頭脳労働と肉体労働は平等に評価される。日本と違い、キブツの根本思想のなかに農業こそが人間社会の基盤であり、大地に立って汗を流すことこそが人間本来の生き方なのだとする理念が流れているためである。③自然にめぐまれ、その地形・地域にあった規模の生活を営んでいる。…仕事も、売店も、診療所も、食堂も何もかもが歩いて5分以内のところにかたまわって、だれもが顔見知りですべてすばらしい。

筆者はこの中の②および③については、大山町に大きく受け継がれているように思う。しかし、①については、大山町には貧富の差はあり、給与もあり、労働はお金で計られている。これは、シオニズム運動に端を発したキブツの理念と、貧困からの脱却の拠り所として大山町がとらえたキブツの理念との間に根本的な差があったためであると思われ、大山町が求めたことではなかったであろう。

## V おわりに

第一次～第三次NPC運動によるまちづくりは、ゆたかな生活と活力に満ちた大山町をつくりあげた。町史をはじめ幾多の資料によれば、町を知るには、まさにその歴史と同じ時間を要する（緒方氏談）であろう。ここに、述べさせていただいたのは、あまたある事実のうちのほんの一部である。

現在の大山町は、まだひたすらに走りつづけている。しかし、他の町と同様の問題をももちあわせている。それは、人口の減少と、過疎化であり、また後継者の問題である。大山町が目指してきた今までの地域振興策、つまり、「経済力のある町」、「体力のある町」、「ゆとりとうるおいのある町」<sup>13)</sup>は、前二項に比べて三項めの達成度が低く感ぜられている。第三次研修生のIさんが1975年に「日本人は働き過ぎだなあ、…ヨーロッパでは週末になると大きなキャンピングカーで田舎に出かけ、

それぞれ休暇を楽しむ。日本人はなんとあくせくしていることか」と、感想を記しているが、その点は現在まで持ち越されているということになる。それは、ゆたかな時代に生まれ育った若者たちが、町に魅力を感じにくくなっていることと大いに関係している。

しかし、若者たちで構成された研究班は下記の四つの新戦略を提案している。すなわち、「快適な生活を送る戦略」、「産業が元気になる戦略」、「みんなが主役になれる戦略」、「大山の枠を飛び出す戦略」である。戦後の日本社会の成長と発展のなかで、競争原理に巻き込まれざるをえなかった大山町にも、これからは、生活弱者に配慮した「うるおいのある町」づくりが期待される。

大山町訪問にあたって、お忙しい時間を学生たちのためにさき、説明してくださいました緒方英雄さんはじめ、町の方々にご心より感謝いたします。

### = - O X M O =

#### 大山町の交流

イスラエルのキブツ共同体への研修生派遣を始めとし、ドイツ・ハワイ・中国呉縣市などとも、町や農協が交流を行っています。また、町が中学生を対象に行っている行っている米国のアイダホでのホームステイや韓国研修の事業は、体験をとおして外国文化を学習するものです。一方国内では、福岡市等との「都市と農村」の交流や、環境の異なる「海と山」との交流、或いは関東や福岡の「大山町人会」との交流等々、様々な交流を行っています。

これらの交流は、異文化に触れたときの「感動や驚き」によって、新たな価値観を見出し、それまでとは違った新しい文化の創造へと発展することを期待して行われています。

パンフレット「おおよま」より

13) 緒方英雄 (1992) 「大山町のまちづくり」『地域開発』